

## ヨハネによる福音書5章1-18節 「憐れみへの応答」

### 1A 慈しみの行い 1-9a

1B 律法の中にいる病人たち 1-5

2B 立ち上がらせる憐れみ 6-9a

### 2A ユダヤ人の迫害 9b-18

1B 安息日の戒め 9b-15

2B 父と等しくする方 16-18

## 本文

ヨハネによる福音書5章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回、ヨハネ 4 章を終えました。先週もそうでしたが、5 章を午前と午後の礼拝で分けて、読み進めたいと思います。今朝は、1 節から 18 節の部分、ベテスダの池にいる男をイエス様が癒される奇跡の部分を見ます。

### 1A 慈しみの行い 1-9a

1B 律法の中にいる病人たち 1-5

1 その後、ユダヤ人の祭りがある、イエスはエルサレムに上られた。

再び、イエス様はエルサレムに上られています。前回、4 章では、主と弟子たちがエルサレムの過越の祭りから出て、それからユダの荒野に行き、そしてサマリアを通過、ガリラヤに来られたところを見ました。再びエルサレムです。そしてここでも再び、ユダヤ人の祭りです。ユダヤ人の成年男子は、年に三度、イスラエルの三大祭りである、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りを祝うためにエルサレムに上ることが、律法によって命じられていました(出エジプト 23:17)。使徒ヨハネは、他の福音書にはない、イエス様がこれらの祭りを守るためにエルサレムに都上りしている姿を、何度となく記しています。

2 エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があり、五つの回廊がついていた。

エルサレムの城壁には、数々の門がありましたが、神殿の境内に隣接していた北のところに「羊の門」があったと言われています。当時は、神殿のいけにえの羊が、この門から連れてこら



れたので、そう呼ばれていたのでしょう。今のエルサレムでも、最近までその辺りでアラブ人たちの羊市場があったそうです。

そして、神殿の丘の北側は、神殿などで使うため、北から流れてくる川を貯める施設の遺跡が、いろいろ残っていますがベテスタの池はその一つです。いけにえが屠られて流される血を洗淨するためにも使われました。福音書の書かれた当時は、これが医療と儀式のために使われていました。ヨハネはそれを、ヘブル語で「ベテスタ」と呼んでいます。この名前の意味が大切です、「慈しみの家」です。「ベト」が家で、「ヘセド」が慈しみですが、それでベテスタ、慈しみの家です。

それから、「五つの回廊」があります。回廊とは、柱が並んでいる廊下のことを指しますが、それが五つありました。ここにも大事な意味が隠されています。その五はモーセ五書を表しているからです。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を示しています。つまり、この池はモーセの律法に囲まれていて、その中には慈しみがあるということです。主がモーセのご自身を現わした時に、ご自分の名を次のように宣言されました。「出エ 33:6-7 主、主はあわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、恵みを先代にまで保ち、咎と背きと罪を赦す。…」主が、律法の中で示されていたのは、この方がいかに慈しみ深いかということでした。確かに、イスラエルの民は金の孔子を拝み、性的に乱れていたのですが、主は彼らを滅ぼすことなく、恵みと憐れみをかけてくださいます。

3 その中には、病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた。そして、引照部分に、続きがあります。彼らは水が動くのを待っていた。4 それは主の使いが時々この池に降りて来て水を動かすのだが、水が動かされてから最初に入った者が、どのような病気にかかっている者でも癒されたからである。

実際に天使がここにやってきて、その水をかき回しているのかどうかは分かりません。もしかしたら、間欠泉のように定期的に水や温水が噴き出すものがどこかにあって、それで水がスパのように動かしていたのかもしれない。けれども、実際がどうであれ、実際に癒された人がいることは確かです。もし何も起こっていなかったら、このようにして病人が集まってくるはずがありません。水が動くのが天使によるものであること、そして最初に入りさえすればどんな病気でも癒されること、これを信じて彼らはそこにずっと伏せていたのです。

5 そこに、三十八年も病気にかかっている人がいた。

ここにも、隠された意味があります。38年という期間をユダヤ人が聞けば、イスラエルが荒野をさまよった長さと同じだということです。イスラエルの民は、エジプトを出てからしばらくして、神が約束してくださったカナン人の地に入ろうとしたとき、多くの者がそこに巨人がいるとのことで不信仰

に陥り、神が裁きとしてエジプトを出てから 40 年間、そこをさまよい歩くと宣言されました。そしてその大人の世代がみな死に絶えさせるというものです。申命記 2 章 14 節に、改めて約束の地に向かう旅を 38 年後に始めることになったことが書かれています。したがって、エルサレムにおいて、モーセの律法にある神の慈しみがあるとされる中で、それでも癒されない男がここにいる、ということであり、それは約束を手に入れられていない、荒野をさまよっているイスラエル人のようだ、ということです。

ヨハネは、福音書の始まりでこう言いましたね、「1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」ユダヤ人たちには、律法が与えられ、神殿も与えられていたのですが、それでも約束の慈しみを手にすることができていなかったという、もどかしさがありました。彼らは律法によって、神の慈しみにあずかることができていなかったのです。しかし、イエス様が恵みとまことをもたらされました。イエス様にあって、律法にある神の慈しみが実現したのです。カナの婚礼のことを思い出してください、水がめが六つありましたが、イエス様は婚礼のためにぶどう酒に変えられました。神の数は七でしたが、手の水洗いのための儀式のために用意されていた水がめは六つしかありませんでした。足りなかったのです。形として整っているのですが、実体が足りなかったとも言えるでしょう。

私たちは、この「足りなさ」の中で生きていると言っても過言ではないでしょう。人の努力や善意によって、いろいろな必要が満たされています。病にかかれば医者があるし、お腹が空けばコンビニがあるし。けれども、何か足りないと思って、教会に足を運んでいるのではないかと感じます。前回、読みましたサマリアの女の話で、彼女に対してイエス様が、「この水を飲めば、また渴きます。」と言われたとおりです。私は、イエス様を知る前の自分の人生を思い出します。両親は健全であったし、必ずしも貧しくなかった。良い学校に行けた。友達もいた。いわゆる不自由はありませんでした。ところが、ネジが外れてしまったように、高校生の半ばから落ち込み始め、抑うつ的になり、その内側の葛藤をどこに持っていけばよいか分かりませんでした。ところが、イエス様が来られました。理屈ではありません、この方にあって、その抜けている部分が完全に埋められたのです。

以前、実は少しの間だけ、イスラエルのダンスを踊るサークルに通いました。そこで踊られた一つは、「マイム・マイム」です。戦後、GHQ が公立学校で踊るようにさせたのですが、なんとこれはイスラエルのダンスです。そしてマイムは水であり、イザヤ書から取られたものです。しかも、その御言葉に「イエス」、主の救いという言葉が入っているのです。「あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から。(12:3)」この「救い」が、イエスになっています。これを踊るのですが、私には空しさが心に広がりました。なぜなら、その救いを知らないままで人々が踊っている姿を見るからです。内側から救いの泉が流れ出ていないのに、どうして踊れるのか？と思いました。形はあるのですが、肝心の中身がない、実体がないという空しさです。

## 2B 立ち上がらせる憐れみ 6-9a

6 イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」

イエス様は数多くの病人を、この池の回りに見ました。けれども、この 38 年間足なえであった男に近づかれました。「すでに長い間そうしていることを知ると」とありますが、単に情報として知ったということではありません。「長い期間、このようになっていたのだな」と同情されて、憐れんと言われたのです。ベテスタという名のように、神の慈しみをもってこの男に近づかれたのです。イエス様は、このように個人に近づいてくださいます。大学病院のように、短い時間でなるべくたくさんの人を診療して、ベルトコンベアのごとく患者が入れ替わり、立ち代りするようなそういう非人間的な方ではありません。一人ひとりを見ておられます。ただ憐れんでくださいます。大勢いる人々の中から、あなたを捜して、そして同情して下さるのです。

7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」

イエス様は、「良くなりたいか」と尋ねられました。けれども男は、「はい、良くなりたいです」と答えませんでした。なぜ直っていないかの理由を、言い訳をつらつら述べているだけです。彼は、体が病んでいるだけではなく、癒されたいという意味まで砕かれてしまっています。私たちはどうでしょうか？ 多くの方は、今、自分の置かれている状況の中で失望しています。あきらめています。「良くなりたいか」と問いかけられたとしても、「これまで自分で努力していましたが、努力する度にその期待が裏切られるのです。」と答えてしまうのではないのでしょうか？ そして、無力な状態で、無気力なまま、その問題をそのままにしていることはないでしょうか？

けれども、イエス様は、「良くなりたいか」と聞かれます。これが、信じるということです。自分には自分を良くする力などありません。しかし、イエスは、ご自身が死者の中から甦られました。その力をもって、「良くなりたいか」と聞かれます。その力を信じるのです。

8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」9a すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。

イエス様のこの命令を聞いた男のことを考えてみましょう。今、病気が直らない説明をしたばかりです。それにも関わらず、「起きなさい」とこの人は言われます。でも起きてみたのです。するとたちどころに足とくるぶしが強くなり、起きることができたのです。福音書の中には、このようなイエスの命令が数多くあります。「こうしなさい」という命令は、人間的には不可能です。けれどもその命令にあえて従ってみようとする時に、それに従うことのできる力を神が与えてくださいます。大事な

のは、従うという意志です。

しかし、実は、彼には深刻な問題があったことが次の話から分かってきます。イエス様は、以前、過越の祭りのためにエルサレムに来られた時に、多くの印を行い、人々がご自身を信じました。しかし、イエス様ご自身は、人のうちに何があるかを知っておられたので、彼らにご自身をお任せになりませんでした(2:24-25)。彼も、肉体の癒しは受けたが、真実な信仰は持っていなかった一人であることが次の話から分かってきます。

## **2A ユダヤ人の迫害 9b-18**

### **1B 安息日の戒め 9b-15**

9b ところが、その日は安息日であった。10 そこでユダヤ人たちは、その癒やされた人に、「今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない」と言った。

ここから、ユダヤ人の迫害が始まる、きっかけとなる事件を見ていきます。名付けて、「ベテスダ事件」です！イエス様はこれまで、律法について厳格であり、先祖からの言い伝えも守っていたパリサイ人について、警戒しておられました。イエスと弟子たちがバプテスマを授けておられた時、それがパリサイ人たちの耳に入ったことを知ると、ユダヤからガリラヤの方に行かれたことが4章の始まりに書いてあります。パリサイ人たちが求めていたのは、いわば「形」にこだわる古い秩序です。イエス様が、「古い革袋」と言われたことです。「マル 2:22 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるものです。」

律法には、安息日に仕事をしてはいけないという戒めがあります。エレミヤ書 17 章に、「17:22 また、安息日に荷物を家から出すな。いかなる仕事もするな。安息日を聖なるものとせよ。わたしがあなたがたの先祖に命じたとおりに。」とあります。そこで、これに「荷物を出す」というところを、自分が伏していた床を運ぶのもそれに該当すると解釈していました。けれども、エレミヤ書のこの箇所は、商売をするためにエルサレムの門のところで物を持ってきてはならない、屋台を立ててはならないという文脈で語っていることです。病気が治るということは、まさに神の慈しみの現れであり、神の救いであり、主にある安息を得る時であります。しかし、そうした「恵みとまこと」というのは、彼らにとっては新しいぶどう酒であり、容認できないものだったのです。

私たちが、神の救いや癒しに喜べなくなったら、恐ろしいことです。この指導者たちも、この男が長い間、ベテスダの池にいて伏せていたのを見ていたはず。顔なじみになっていたはず。そして今、恵みの御業だとして神をほめたたえてもよいのに、それなのに今、床を運んでいって息巻いているのです。神の意図されない規則や秩序がというものが、いかに人を束縛するか知れません。

11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を治してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と私に言われたのです。」12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』とあなたに言った人はだれなのか。」13 しかし、癒やされた人は、それがだれであるかを知らなかった。群衆がそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。

なんとこの男は、イエス様が誰か知らずに、癒していただいていた。それは、イエス様がすぐにその場を立ち去られたからだとあります。ユダヤ当局のこの締め付けを意識されていたからかもしれません。また、騒ぎがすぐに起って、この男に続けて話しかけることができなくなるからと思っておられたからかもしれません。

14 後になって、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない。」

イエス様はこの男を忘れておられたのではありません。むしろ、彼が真の意味で健康でいられるように、続けて働きかけを行なっておられます。フォローアップは非常に大事です。目に見えるたちで体が癒されることはすばらしいですが、それよりもっと大切なことがあります。それは「罪」です。魂の癒し、罪の赦しとその悔い改めが、私たち人間にとって、ずっと大切なことです。他の福音書では、中風の者がイエス様のところに運ばれてきた時も、イエス様が彼に始めに話しかけられた言葉は、「マル 2:5 子よ、あなたの罪は赦された。」でした。

聖書には、「罪の報酬は死です。(ローマ 6:23)」とあります。そして、「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている(ヘブル 9:27)」とあります。病気が直っても、必ず死にます。そして罪の赦しがなければ、神の審判が待っています。けれどもキリストが私たちの罪のために十字架につけられ、死んでくださった。このことを信じれば、罪の赦しと靈魂の癒しが与えられるのです。そして、よくなっても、イエス様がここで言われているように、「もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない」のです。宝くじで、億単位で当選した人が、人生の奈落の底を味わうという話があります。同じように、自分がどんなに神から良いことをしていただいても、心の中にある罪の性質を解決してもらわなければ、自分で自分を制御することはできなのです。

15 その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を治してくれたのはイエスだと伝えた。

彼は、イエス様のことをユダヤ当局に通告してしまいました。罪のことを指摘されてからかもしれません。自分に都合の悪いことを言われて、嫌になったかもしれません。または、当局を恐れていたからかもしれません。しかし 9 章には、イエス様に目を治していただいて、目が見えるようになって、当局に連れられた人が出てきます。彼も安息日に癒していただきました。彼はユダヤ人議会の中で、この方は神から来られた方だと発言し、そのためユダヤ人共同体から追い出された後に、イエ

ス様に会い、イエス様を自分の主として受け入れました。

ここに、私たちに大きな語りかけがあります。「イエス様のところに、本気で近づき、この方を受け入れたいのか？」ということです。イエスにこそ命があります。しかし、それは形だけがあって中身の無い、古い秩序から出ていくことでもあります。使徒ペテロは、こう言いました。「Ⅰペテ 1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されました。以前もの、以前の考え方、世に生きている中で培った価値観、こうしたものを、イエス様にある命を得るために置き去りにするのが、私たちに与えられている道です。しかし、ユダヤ当局に、自分を癒した方を通報してしまうとは、彼はしり込みして、恐れて、その命から離れてしまいました。そこまで、自分の罪から離れようという気もなかったのかもしれませんが。新しいぶどう酒は、新しい皮袋でないと入れられません。信じるとは、恐れとの戦いです。「ヘブ 10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

## 2B 父と等しくする方 16-18

16 そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。

福音書は、安息日のことで、ユダヤ教のパリサイ派が中心となってイエスを死刑にするように働きかけたことを記しています。安息日を破れば、死刑だからです。しかし、イエス様は安息日を破られたのではなく、彼らの解釈に違反していたのです。主の命令をないがしろにして、解釈や神学を聖書と同じ位置に置く過ちは、教会史の中で長年続いてきました。正しいとすることこそが、実は危険であり、主ご自身を否定する異端になりかねないことを知らないといけません。

ともかくも、このベテスダの池での出来事が、その発端となる事件でした。しかし、イエスを殺したいと思うようになったのはそれだけでありません。

17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」18 そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っていただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。

安息日と言っても、神はもちろん生きて働かれています。もし働きを止められたら、この地球、宇宙の秩序はたちまち破壊されてしまいます。「詩篇 121:4 見よイスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。」とあります。そしてイエス様は、この神とご自身と同等のところに置いたのです。

日本語で書かれたキリスト教についての書物を開けば、大抵こう書いてあります。「イエスは、自分のことを神であると主張したことはない。」いかがでしょうか？もしイエス様をご自分のことを神であると主張していなかったら、ユダヤ人はこのようにイエスを殺そうなどと思わなかったのです。イエスは神を「わたしの父」と呼ばれています。ご自分を神の部類に入れられておられるのです。もちろん神が二人いるのではなく、神学用語で「三位一体」と呼びますが、三つにして一つの神であります。そしてこれから、イエス様がここにいるユダヤ人たちに、ご自分が神と等しいことについて、そしてその証拠があることについて、そして証拠があるにも関わらずなおも受け入れないことについて話されますが、午後礼拝で読んでいきたいと思えます。

ベテスタの池で起こったことを通して、私たちは神の慈しみ、恵みがあることを知ります。今、皆さんが置かれている状況の中にも、神の恵みが働く余地があります。イエス様は、「よくなりたいか」と呼ばれています。そして、「起き上がりなさい」と言われています。そして、罪の問題があります。罪を悔い改め、主ご自身のところに行くという決断です。ところが、そこに献身せず、古い秩序の中に留まり、罪の中に留まることもできます。恐れとの戦いです。